巻頭エッセイ

カタカナ表記の名前に思い込み

大石芳野　Oishi Yoshino

言葉は文化だからどの民族の言葉も実に複雑で難しく，発音やその表記法も入り組んでいる。その通りに発音しているつもりでも，子どもたちの率直な笑いに包まれてしまうことがある。

1981 年以来，たびたび訪れているベトナムでもしかりだ。例えば「ありがとう」の「カムオン」。これは「感恩」という漢字だったのがフランス植民地時代にアルファベット化が進んで今日に至ったらしい。だからどの文字にも，上や下に発音記号の点，山，波などを付けて語意の違いを表示している。

けれどカタカナで表記するとどれも同じになってしまうことが多い。人名はさらに分かりにくく，「チュンさん」といってもいくつもの「チュン」の音と表記があって，男性，女性，意味などさまざまだ。箸と橋，砂糖と佐藤など，日本でも同じことがいえるから，ベトナムも日本も漢字文化の民族としては仕方がないことと思っていた。

ところが，漢字からほど遠いドイツ語でも同じようなことがあって，恥をかいたことがある。英語もフランス語もスペイン語なども，日本語のカタカナで書けば，どれもそういう曖昧（あいまい）なことになる。ちょっと考えれば当たり前のことだ。ところが，外国語に疎いわたしのカタカナで表示されたものへの思い込みは恐ろしいほどのものがある。

恥をかいた名前は，ドイツ語の「ルドルフ・ヘス」だった。この名前が第二次世界対戦中のナチス軍の幹部と特定されれば，わたしにとってはアウシュビッツ強制収容所の責任者のことでしかない。彼は戦後，同収容所で大勢の囚人たちが見守るなかで絞首刑になった。

ところが，ナチス軍の幹部でも，発音は同じだがスペル違いでもう一人いたのである。このもう一人の方がヨーロッパでは，一般的にはもっと有名だったようだ。

アウシュビッツなどに象徴されるナチス強制収容所を生き延びた人たちを，わたしは 1986 年から何年間もポーランドに通って取材を重ねた。専門的に研究している研究者や学者などの話にも興味を抱き，たびたび訪ね歩いた。そのなかで語られた「ルドルフ・ヘス」は一人しかいなかったと思うし，関係者たちにとっては絶対に忘れられない名前である。彼は「ヒットラー」に続いて許し難い代名詞のような存在の人物だ。取材を重ねていくうちにいつの間にかわたしも影響されて，「ヘス」と見聞きしただけで，瞬間的にその人物を思い出すようになっていた。けれどようく考えると，重複した名前はいくらでもいる。有名，無名にかかわらずに。

もう一人のスペルが違う「ルドルフ・ヘス」は，ヒットラー総督の最も信頼される側近の一人で，ナチ党副総統だったのである（後に実権を失った）。

「カムオン」や「チュンさん」に始まってカタカナ表記に甘んじていたわたしにとって，「ルドルフ・ヘス」の失敗は起こるべくして起こったのかもしれない。カタカナ表記の持つ危うさを意識しながら外国語と付き合わなければならないことを強く認識させられた。

おおいし　よしの

東京都出身。大学を卒業後，ドキュメンタリー写真に携わり今日に至る。戦争や内乱，急速な社会の変容などによって傷つけられ，苦悩しながらも逞しく生きる人びとの姿をカメラとペンで追っている。著作：『夜と霧は今』，『カンボジア苦界転生』『HIROSHIMA 半世紀の肖像』，『ベトナム 凛と』，ほか多数。受賞：芸術選奨（文部大臣新人賞），児童福祉文化賞（大賞），土門拳賞，ほか多数。